

【キツネの雨傘】

むかし、妙正寺の辺りに、お百姓をしてるおじいさんがおりました。ある日、おじいさんは中野の方に用事があつて午後から出掛けて行きました。思いのほか時間が掛かり、おじいさんの帰る頃には、秋の短い日はとっぷりと暮れておりました。おじいさんは孫の土産にと団子をいっぱい買って懐にいれ、急いで歩いてきましたが、あいにくのことにシトシトと雨が降り始めてしまいました。

「もう少しで家に着くっていうのに、とんだところで雨にあつちまつた」

そのころ妙正寺の辺りは、畑や原っぱや林ばかりで道幅も狭く、慣れた道といつても真つ暗やみで何も見えません。足下の草はだんだんぬれてくるし、それに寒くなってきました。おじいさんは上っ張りを頭にかぶり、懐の団子を抱え、「早く帰って孫たちに食わしてやりてえなあ。喜ぶ顔が見えるようだ」と急いで歩きました。

林の中に差し掛かると、やみの中から人影がボーツと見えてきて、おじいさんに近付き、「まあまあ、こんなにぬれて。お入りください」と聞いたこともないような美しい声で、雨傘を差し掛けてくれました。

「どこの娘さんか知らないが、ありがとうございます。じゃあちよつとそこまで入れていってもらいますか」

おじいさんは喜んで傘に入れてもらい、家の前まで送ってもらいました。お礼を言うと、娘さんは深々とお辞儀をして行つてしまいました。

「美しいむすめだなあ・・・」とおじいさんはうっとりした気分になって家に入りました。「今帰ったよ。さあさあ、おめえたち土産があるぞ」と孫たちに団子を出そうと懐に手を入れてみると、懐の中は空っぽ。さつきまで抱えていた団子がありません。

「あいつ！もしかしたらキツネだったのか？」おじいさんは

悔しくて仕方がありません。きれいな声と美しさに、うっとりしていたからなおさらです。

次の日、おじいさんが野菜を売ったお金で油揚げを買って帰って来ると、林の中で昨日と同じ娘さんが、何も言わずに雨傘を差し掛けてきました。

「キツネの奴め、雨も降っていないのに傘を差し掛けて、昨日の団子で味をしめて又やってきたな」と思ったおじいさんは、知らん顔してしばらく歩いてきましたが、野菜を担いでいた天びん棒で、娘のおしりをたたいてやると、「ギャアー！」という声を出して、太いしっぽをユサユサゆすりながら逃げていきました。

それからは、もう雨傘を差し掛けるきれいな娘は出てこなくなつたそうです。

(文・カット 杉並民話の会 参考 森泰樹著『杉並区歴史探訪』)

妙正寺 山号は法光山、日蓮宗の寺院です。文和元年(1352年)に下総国(現千葉県)中山の法華寺第三世・日祐上人によって妙正寺池のほとりにお堂を建て、法華経の守護である天照大神・八幡大神・春日大社など三十三番神を勧進し奉つたのが始まりと言われている。天保三年(1855年)に社殿を再建し、その三年後に徳川三代将軍・徳川家光が鷹狩りの際に立ち寄つたのをきっかけに葵の紋幕と朱印地五石を賜り御朱印寺として有名になった。本堂は天保元年(1830年)に焼失したが、天保三年に再建され、昭和六年(1931年)に改築され現在に至っている。本堂には本尊のほか安産に靈験ある鬼子母神像(かつては江戸城の大奥にあった)や妙法寺池の弁天島(池に浮かぶ小島)にあった弁財天が祀られている。また、江戸時代の囲碁棋士 六世本因坊・知伯(井口半衛門の息子)の墓があり1980年に杉並区指定史跡文化財になっている。

